

台湾の閩南語に就いて. II ——転調及び音韻同化に就いて——

瀧澤 英一

Über den Min-Nan Dialekt in Formosa (Taiwan). II ——Ton-Transformation (Tone Sandhi) und Assimilation——

Êi Iti TAKIZAWA

§ 0. 序

「台湾の閩南語に就いて. I」では、台湾語の歌謡に現れる「來lai⁵」の意味 Bedeutung に就いて考察する際に、台湾の閩南語の音韻と声調交替(転調)に就いても触れたが、今回は主として、声調交替(転調) Tone Sandhi と音韻の同化 Assimilation に関して述べる。此处で使用する記号 [] や () などは前回のものを踏襲する。

§ 1. 音 節

漢語(シナ語)の音節構造は、夫々の方言(例えば、閩南語、北京方言など)を含めて、I+M+V+E/T と分析される。I は音節頭位の子音、V は音節の中核を成す主母音、M は音節頭位の子音 I と主母音 V との中間に現れる副母音(介母とも言われる)、E は音節末尾の副母音又は子音である。T は音節全体の上に被さる声調(音調) Tone を示す。台湾の閩南語の音節構造も、この様な四箇の座を持つ IMVE 構造と声調 T とで表されると考えることが出来る。

樋口靖「台湾語会話(1992年, 東方書店)」に依れば、台湾の閩南語の音節の組立は、C₁+V+C₂/T と定式化出来るであろうと言う。C₁ は語頭子音(音節頭位の子音)で、C₂ は音節末尾の子音を表す。

V は音節の中核を成す母音で、単母音・二重母音・三重母音の三種類である。単母音は、a [a], i [i], u [u], e [e], o [o] 又は [ə], ɔ [ɔ], ng [ŋ], m [m], である。二つの鼻音 [m] と [ŋ] とは音節主音(Syllabic)で、羅常培はこれらを声化韻と呼んだ。鼻音 [m] と [ŋ] とはそれだけで音節を作っている。夫々に、比較的長く強く発音される。此等二つの鼻音を母音扱いとする。

二重母音は、ai, au, ia, iu, io, ui, oa, oe, の8種であり、三重母音は、oai と iau との2種類だ

けである。

音節頭位の子音 C₁は、教会羅馬字の記法で表わせば、b, ch, chh, g, h, j, k, kh, l, m, n, ng, p, ph, s, t, th, の17種の子音である。

音節末尾の子音 C₂は、m, n, ng, p, t, k, の6種類である。C₂が存在しない音節(母音 V で終わる音節)は開音節と呼ばれる。

C₁と C₂との中で述べた m, ng は子音であって、母音扱いをした [m̩], [ŋ̩] とは異なる音素 phoneme である。

樋口は、(介母) + (母音) を一つの母音の集団 V と考えたのであろうか。この考え方の C₁+V+C₂/T なる構造は実用上非常に有効である。

音節末尾の子音 C₂を更に詳しく述べると、次の第1表に示す8種となる。教会羅馬字では、軟口蓋鼻音 [ŋ] を ng で表し、声門閉鎖音 [ʔ] を h で表す。

第1表 音節末尾子音 C₂

調音法 調音点	両唇音	歯茎音	軟口蓋音	声門音
鼻 音	m [m]	n [n]	ng [ŋ]	[ʔ]
閉鎖音	p [p]	t [t]	k [k]	h [ʔ]

母音と音節末尾鼻音 m, n, ng, との組み合わせでは、am [am], im [im], iam [iam], an [an], in [in], un [un], ian [iɛn] 又は [ɛn], oan [oan], ang [aŋ], eng [Iŋ] ((北)) 又は [iəŋ] ((南)), ong [ɔŋ], iang [iaŋ], iong [iɔŋ], が有る。[I] は [i] と [e] との中間の音である。

母音と音節末尾子音 p, t, k, との組み合わせでは、ap [ap], ip [ip], iap [iap], at [at], it [it], ut [ut], iat [iet] 又は [et], oat [oat], ak [ak], ek [Ik] ((北)) 又は [iæk] ((南)), ok [ɔk], iak [iak], iok [iɔk], が有る。第1表で閉鎖音 -p, -t, -k, -h, で終る音節は

入声 (にっしょう) と呼ばれる。

教会羅馬字では, ȯ [o] は広い「オ」である。o [o] は狭い「オ」であって, 「ヲ」の音に近い。

台湾の閩南語には鼻音化音節 (鼻声化音節) が有る。この音節末尾の音素は半鼻音とも呼ばれる。教会羅馬字では, 音節末尾に上添記号ⁿを付すが, 此处では, ⁿの代わりに N を付す。N の前の音素が鼻音化されることを示す。

[参考] 1991年10月に福州市在住, 泉州生まれの李彬 (女性, 60才位) は「今仔日」kin¹-a²-jit⁸を [kin¹-na²-lit⁸] と明瞭に発音した。一方, 台湾の鳳飛飛 (20才台の女性歌手) は歌謡テープ (1980年頃の録音か) の中で, 「今仔日」を [kia²: lit⁸] と歌っている。((泉州音))・((台北音))では, ((漳州音))・((台南音))の j [dz, dʒ] が l [l] に成るのは分るが, ((台北))では kin¹が kiN¹に成るのであろうか。

§ 2. 声調

台湾の閩南語の声調 Tone は 7 種類の調素 Toneme を区別する。他に, 輕声が有る。声調番号と調値を 5 度制数値で表せば次の様である。

- 第 1 声 (陰平) 高平調。高く平らに。 —^{55}
- 第 2 声 (陰上) 下降調。初め高く急に下降する。 $\text{—}\downarrow_{\text{51}}$
- 第 3 声 (陰去) 低平調。低く下降気味に。 $\text{—}\downarrow_{\text{11}}$
- 第 4 声 (陰入) 低平短調。低く短促に。 $\text{—}\downarrow_2$
- 第 5 声 (陽平) 上昇調。中間の高さから上昇する。 $\text{—}\uparrow^{\text{35}}$
- 第 7 声 (陽去) 中平調。中間の高さで平らに。 $\text{—}\downarrow_{\text{33}}$
- 第 8 声 (陽入) 高平短調。高く短促に。 $\text{—}\downarrow^{\text{4}}$

輕声は第 3 声と第 4 声の中間位の高さで, 弱く発音される。

第 6 声に相当する声調は第 2 声と合同しているので, 第 6 声を記さない。

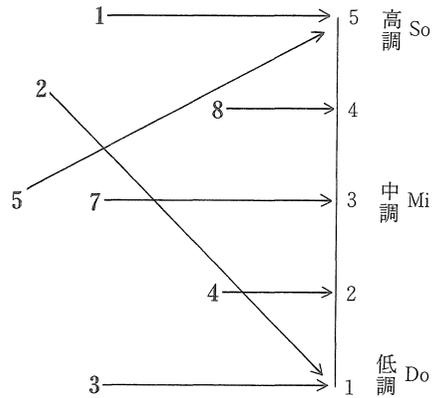
陰平, 陰上, 陰去, 陰入, 陽平, 陽去, 陽入, は 夫々, 上平, 上声, 上去, 上入, 下平, 下去, 下入, と呼ばれることが有る。

声調 T を示すには, 音節末尾の次に上添記号, 1, 2, 3, 4, 5, 7, 8, を付ける。輕声調には 0 を付ける。

第 1 図に声調図を示す。太い数字 1, 2, 3, 4, 5, 7, 8, は声調番号を, 右辺の 1, 2, 3, 4,

5 は音調の高低を示す。1 は Do 音の高さ, 3 は Mi 音の高さ, 5 は So 音の高さ (音の pitch) を示す。

[例] 「天」thin¹, 「地」toe⁷, 「人」lang⁵, 「山」soan¹, 「水」chui², 「海」hai², 「東」tang¹又は tong¹, 「西」sai¹, 「南」lam⁵, 「北」pak⁴, 「風」hong¹, 「天氣」thin¹-khi³, 「対面」tui³-bin⁷, 「日時」jit⁸-si⁰ (晝間), 「暝時」mi⁵-si⁰ (夜)。



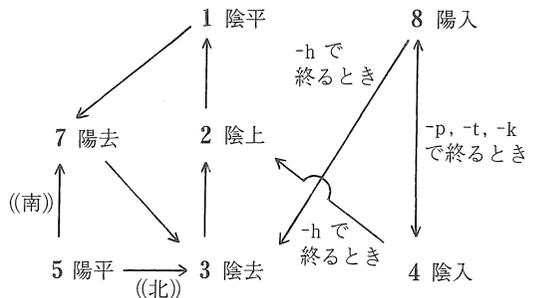
第 1 図 声調図

§ 3. 声調交替 (転調) Tone Sandhi

声調交替 (転調とも言う) とは, 中間に音声の間 (ま) (Pause) を置かないで発音される多音節形式 (多音節の構造) (例えば, 複音節の単語・複合語・句・節・文などの様に, 意味内容が固く結ばれている形式) で, 輕声音節が最終音節となる場合を除いて, 最終音節がアクセント核となり, この核音節は本来の調値のままであるが, それよりも前に有る音節の調値が他の調値に変わることを言う。この場合に, 転調するには一定の交替規則が有る。

最終音節が輕声である時には, 最終音節の前の音節は転調しない。

転調 (声調交代) の規則を第 2 図に示す。



第 2 図 声調交代図 (転調図)

第2図で、矢印の方向は転調する先の声調を示す。転調する場合には、第1声は第7声に、第2声は第1声に、第3声は第2声に転調する。第5声は((台北))では第3声に、((台南))では第7声に転調する。

入声では、音節が -p, -t, -k で終わるとき、第4声は第8声に、第8声は第4声に転調する。即ち、第4声と第8声とは互いに交替する。

入声が -h [ʔ] (声門閉鎖音) で終わるときには、第4声は第2声に、第8声は第3声に転調する。

三音節以上の音節の連鎖から成る語や構造の場合にも、最終尾の音節を除いて、総ての音節が上記の規則に従って転調する。

王育徳「台湾語入門」及び樋口靖「台湾語会話」の例を参照する。

[第1声→第7声の例]

「風吹」hong¹⁷-chhe¹ (凧), hong¹⁷は原調の第1声が第7声に転調することを表す。「張持」tiun¹⁷-ti⁵ (予防する), 「先生」sian¹⁷-sin¹ (先生), 「真多」chin¹⁷-choe⁷ (非常に多い)。

[第2声→第1声の例]

「早起」cha²¹-khi² (朝), 「火燒」he²¹-sio¹ (火事になる), 「囡仔」gin²¹-a² (子供), 「寫批」sia²¹-phe¹ (手紙を書く), 「憂愁」iu²¹-chhiu⁵ (憂愁), 「果子」ke²¹-chi² (くだもの)。

[第3声→第2声の例]

「相簿」siong³²-pho⁷ (アルバム), 「蛀齒」chiu³²-khi² (虫歯), 「唱歌」chhiun³²-koa¹ (歌を歌う), 「報紙」po³²-choa² (新聞)

[参照] 「看見」khoan³-kin⁰ (見かける, ふと目にする) 「看見」khoan³²-kin³ (目をかける, 面倒を見る)。

[第4声→第8声の例]

「即滿」chit⁴⁸-ma² (今, 現在), 「結婚」kiat⁴⁸-hun¹ (結婚する), 「逗遛」chhit⁴⁸-tho⁵ (遊ぶ), 「国家」kok⁴⁸-ka¹ (国家)。

[第5声→第3声の例] ((台北))

「台湾」tai⁵³-oan⁵ (台湾), 「人氣」jin⁵³-khi³ (人氣)。

[第5声→第7声の例] ((台南))

「茶碗」te⁵⁷-au¹ (茶碗), 「縁投」ian⁵⁷-tau⁵ (ハンサムな)。

[参照] 「無去」bo⁵-khi³⁰ (無くなる), 「無去」bo⁵⁷-khi³ (行かなかった)。

[第7声→第3声の例]

「父母」pe⁷³-bu² (父母), 「議論」gi⁷³-lun⁷ (議論する), 「外国」goa⁷³-kok⁴ (外国), 「事誌」

tai⁷³-chi³ (出来事), 「露水」lo⁷³-chui² (露)。

[参照] 「後日」au⁷-jit⁸⁰ (明後日), 「後日」au⁷³-jit⁸ (後日)。

[第8声→第4声の例]

「賊仔」chhat⁸⁴-a² (盗人, 泥棒), 「熟似」sek⁸⁴-sai⁷ (懇意な, 知り合いの), 「讀書」tak⁸⁴-chu¹ (勉強する), 「立法」lip⁸⁴-hoat⁴ (立法), 「一去」chit⁸⁴-khi³ (一度行く, 一度去る)。

[-h で終わる入声第4声→第2声の例]

「桌頂」toh⁴²-teng² (机の上), 「拍算」phah⁴²-sng³ (段取りをする), 「客廳」kheh⁴²-tian¹ (応接間), 「惜困」sioh⁴²-kian² (子供を可愛がる)。

[-h で終わる入声第8声→第3声の例]

「食錢」chiah⁸³-chi⁵ (汚職をする), 「笠仔」loeh⁸³-a² (笠), 「食飯」chiah⁸³-png⁷ (御飯を食べる), 「白菜」peh⁸³-chhai³ (白菜), 「月光」geh⁸³-kng¹ (月の光), 「月光暝」geh⁸³-kng¹⁷-mi⁵ (月夜), 「月暝」geh⁸³-mi⁵ (月夜), 「月娘」geh⁸³-niu⁵ (お月様, 嫦娥)。「月」はgeh⁸((台北)), goeh⁸((台南))と発音される。

但し、転調後の第2声及び第3声は本来の第2声、第3声よりも短く聞こえる。

[多音節語や多音節構造の例]

「錄影帶」lok⁸⁴-ian²¹-toa³ (ビデオ・テープ), 「看錄影帶」khoan³² lok⁸⁴-ian²¹-toa³ (ビデオ(テープ)を見る), 「愛看錄影帶」ai³² khoan³² lok⁸⁴-ian²¹-toa³ (ビデオ(テープ)を見るのが好き), 「李仔歹果子, 唔通食多。」li²¹-a² phain²¹ ke²¹-chi², m⁷³-thang¹⁷ chia⁸³choe⁹. (ずもものは悪いくだものだから, 沢山食べてはいけな)。

転調の規則は、上記の様に明確に定まっているので、今後は、本来の音調のみを記すことにする。

更に、上述の普通の転調の他に、特殊な転調も有るが、今回は、特殊な転調については省略する。

§ 4. 音韻の同化

音節と音節とが緊密に結びついた時、或る音(特に、後の音節の語頭子音)が、前後の音の接続の影響で、別の音に転化する場合が有る。これを音韻の同化 Assimilation と呼ぶ。台湾の閩南語の同化現象は、大変複雑である。台湾総督府「日台大辞典」、岩崎敬太郎「日台言語集」、陳輝龍「台湾語法」、を参照した。此等の書物では「同化」を「音便」と呼んでいる。

以下に例を列挙する。

1) -n の語尾を持つ音節が「仔」-a² (小さな

もの, 可愛らしいもの, などを表したり, 語調を整えたりする為に用いられる [接尾詞] や「兮」「的 (当て字)」「個 (当て字)」 $-e^5$ (…の, …的な, を表す [助詞]). 修飾語を名詞の前に加えるとき, 動詞 (句), 形容詞 (句) を名詞 (句) にするとき, などに用いられる。又, 個数を表す [数量詞] としても用いられる) 及び「下」 $-e^7$ (回数や度数を表す [数量詞]) の前に来るとき, $-a^2$ は $-na^2$ に, $-e^5$ は $-ne^5$ に夫々変化する。即ち

$$\begin{aligned} -n -a^2 &\rightarrow -n -na^2, \\ -n -e^5 &\rightarrow -n -ne^5, \end{aligned}$$

と変化する。

[例]

「囡仔」 $gin^2 -a^2 \rightarrow gin^{21} -na^2$ (子供),
 「印仔」 $in^3 -in^2 \rightarrow in^{32} -na^2$ (印章),
 「絃仔」 $hian^5 -a^2 \rightarrow hian^{53} -na^2$ (胡弓),
 「鏈仔」 $lian^7 -a^2 \rightarrow lian^{73} -na^2$ (鎖),
 「笛仔」 $phin^2 -a^2 \rightarrow phin^{21} -na^2$ (横笛),
 「新兮」 $sin^1 -e^5 \rightarrow sin^{17} -ne^5$ (新しいもの),
 「恁兮」 $in^1 -e^5 \rightarrow in^{17} -ne^5$ (彼等の, 彼等のもの),
 「恣兮」 $lin^2 -e^5 \rightarrow lin^{21} -ne^5$ (あなた方の, あなた方のもの)。

2) $-ng$ の語尾を持つ音節が「仔」 $-a^2$, 「兮」 $-e^5$, 「下」 $-e^7$ の前に来るとき, $-a^2$ は $-nga^2$ に, $-e^5$ は $-nge^5$ に変化する。即ち

$$\begin{aligned} -ng -a^2 &\rightarrow -ng -nga^2, \\ -ng -e^5 &\rightarrow -ng -nge^5, \end{aligned}$$

と変化する。

[例]

「厝仔」 $ang^1 -a^2 \rightarrow ang^{17} -nga^2$ (人形, 絵に画かれた人物),
 「巷仔」 $hang^7 -a^2 \rightarrow hang^{73} -nga^2$ (路地),
 「窓仔」 $thang^1 -a^2 \rightarrow thang^{17} -nga^2$ (窓),
 「葱仔」 $chhang^1 -a^2 \rightarrow chhang^{17} -nga^2$ (葱, ネギ),
 「囊仔」 $long^1 -a^2 \rightarrow long^{17} -nga^2$ (櫃, 留置場),
 「黄兮」 $ng^5 -e^5 \rightarrow ng^{53} -nge^5$ (黄色の, 黄色のもの),
 「紅兮」 $ang^5 -e^5 \rightarrow ang^{53} -nge^5$ (赤色の, 赤色のもの),
 「両兮」 $nng^7 -e^5 \rightarrow nng^{73} -nge^5$ (二個, 二人)。

3) $-m$ の語尾を持つ音節が「仔」 $-a^2$ 又は「兮」 $-e^5$ の前に来るとき, $-a^2$ は $-ma^2$ に, $-e^5$ は $-me^5$ に夫々

変化する。即ち

$$\begin{aligned} -m -a^2 &\rightarrow -m -ma^2, \\ -m -e^5 &\rightarrow -m -me^5, \end{aligned}$$

と変化する。

[例]

「楠仔」 $lam^5 -a^2 \rightarrow lam^{53} -ma^2$ (楠),
 「杉仔」 $sam^1 -a^2 \rightarrow sam^{17} -ma^2$ (杉, 木材),
 「柑仔」 $kam^1 -a^2 \rightarrow kam^{17} -ma^2$ (蜜柑),
 「店仔」 $tiam^3 -a^2 \rightarrow tiam^{32} -ma^2$ (小さな店),
 「金仔」 $kim^1 -a^5 \rightarrow kim^{17} -ma^2$ (金, 黄金),
 「尖兮」 $chiam^1 -e^5 \rightarrow chiam^{17} -me^5$ (尖った, 尖ったもの),
 「金兮」 $kim^1 -e^5 \rightarrow kim^{17} -me^5$ (金の),
 「弱兮」 $lam^2 -e^5 \rightarrow lam^{21} -me^5$ (壊れ易い)。

4) $-k$ に終わる入声が「仔」 $-a^2$, 又は「兮」 $-e^5$ の前に来るとき, $-a^2$ は $-ga^2$ に, $-e^5$ は $-ge^5$ に夫々変化する。即ち

$$\begin{aligned} -k -a^2 &\rightarrow -k -ga^2, \\ -k -e^5 &\rightarrow -k -ge^5, \end{aligned}$$

[例]

「竹仔」 $tek^4 -a^2 \rightarrow tek^{48} -ga^2$ (竹),
 「粟仔」 $chhek^4 -a^2 \rightarrow chhek^{48} -ga^2$ (もみ),
 「玉仔」 $giok^8 -a^2 \rightarrow giok^{84} -ga^2$ (玉),
 「褥仔」 $jiok^8 -a^2 \rightarrow jiok^{84} -ga^2$ (ベッドや寝椅子に敷く薄い敷物),
 「竹兮」 $tek^4 -e^5 \rightarrow tek^{48} -ge^5$ (竹の),
 「玉兮」 $giok^8 -e^5 \rightarrow giok^{84} -ge^5$ (玉の),
 「六兮」 $lak^8 -e^5 \rightarrow lak^{84} -ge^5$ (六個, 六個の)。

5) $-t$ に終わる入声が「仔」 $-a^2$ 又は「兮」 $-e^5$ の前に来るとき, $-a^2$ は $-la^2$ に, $-e^5$ は $-le^5$ に夫々変化する。即ち

$$\begin{aligned} -t -a^2 &\rightarrow -t -la^2, \\ -t -e^5 &\rightarrow -t -le^5, \end{aligned}$$

と変化する。

[例]

「賊仔」 $chhat^8 -a^2 \rightarrow chhat^{84} -la^2$ (賊, 泥棒),
 「窟仔」 $khut^4 -a^2 \rightarrow khut^{48} -la^2$ (穴, くぼみ),
 「杙仔」 $khit^4 -a^2 \rightarrow khit^{48} -la^2$ (杭, くい, 杙),
 「姪仔」 $tit^8 -a^2 \rightarrow tit^{84} -la^2$ (甥),
 「查姪姪仔」 $cha^1 -bo^2 tit^8 -a^2$ (姪),
 「掘仔」 $kut^8 -a^2 \rightarrow kut^{84} -la^2$ (鶴嘴),
 「椰拔仔」 $na^2 -pat^8 -a^2 =$ 「拔仔」 $pat^8 -a^2 \rightarrow pat^{84} -la^2$ (蕃石榴, バンザクロ, バンジロウ, グァバ), pat^8 (北) / $poat^8$ (南),

「擦仔」chhat⁴-a² → chhat⁴⁸-la² (掛軸),
 「彼兮」hit⁴-e⁵ → hit⁴⁸-le⁵ (あれ),
 「此兮」chit⁴-e⁵ → chhit⁴⁸-le⁵ (これ),
 「一下」chit⁴-e⁷ → chit⁴⁸-le⁷ (ちよっと, …
 すると直ちに),
 「別兮」pat⁸-e⁵ → pat⁸⁴-le⁵ (「別的」(別の),
 「別個」(別のもの)).
 [参照]「別位」pat⁸-ui⁷ → pat⁸⁴-lui⁷ (よその,
 他所の).

6) -p に終わる入声⁸, 「仔」-a², 又は「兮」
 -e⁵の前に来るとき, -a²は -ba²に, -e⁵は -be⁵に夫々
 変化する。即ち

-p -a² → -p -ba²,
 -p -e⁵ → -p -be⁵,

となる。

[例]

「盒子」ap⁸-a² → ap⁸⁴-ba² (蓋付き小箱),
 「蛤乖」=「蛤仔」kap⁴-a² → kap⁴⁸-ba² (蛙,
 烏貝),
 「合仔銀」=「合仔」hap⁸-a² → hap⁸⁴-ba² (贗
 銀, にせがね, 銀と銀の間に銅を挟んだ贗の銀貨),
 「葉仔」iap⁸-a² → iap⁸⁴-ba² (葉),
 「掩仔」iap⁴-a² → iap⁴⁸-ba² (張り出し, 母
 屋から張り出した小屋),
 「澁仔」iap⁴-a² → iap⁴⁸-ba² (澁),
 「粒仔」liap⁸-a² → liap⁸⁴-ba² (粒),
 「合仔」hap⁸-e⁵ → hap⁸⁴-be⁵ (挟みもの)。

7) [数詞] の同化

イ)「二十一」から「二十九」迄の「二十」ji⁷
 -chap⁸は jiap⁸((南))又は liap⁸((北))となる。即ち,
 「十」chap⁸→ap⁸と変化する。

[例]

「二十五」ji⁷-chap⁸ go⁷ → jiap⁸ go⁷((南)),
 liap⁸ go⁷((北)),
 「二十九」ji⁷-chap⁸ kau² → jiap⁸ kau²((南)),
 liap⁸ kau²((北)),
 「二十三本」ji⁷-chap⁸ san¹ pun² → jiap⁸ san¹
 pun² (二十三冊),
 「二十四隻」ji⁷-chap⁸ si³ chiah⁴ → jiap⁸ si³
 chiah⁴ (二十四匹, 二十四頭, 二十四羽)。

ロ)「二十一」より「九十九」迄の中の「十」
 chap⁸が ap⁸となる。但し, 最後が丁度「十」の時は,
 そのまま chap⁸である。

[例]

「二十六」ji⁷-chap⁸ lak⁸ → jiap⁸ lak⁸,
 「二十二」san¹-chap⁸ ji⁷ → san¹-ap⁸ chhit⁷,
 「四十七」si³-chap⁸ chhit⁴ → si³-ap⁸ chhit⁴,
 「六十八」lak⁸-chap⁸ poeh⁸ → lak⁸-ap⁸ poeh⁴,
 「八十一」poeh⁴-chap⁸ it⁴ → poeh⁴-ap⁸ it⁴,
 「九十九」kau²-chap⁸ kau² → kau²-ap⁸ kau²,
 ハ)「四十一」より「四十九」迄の「四十」si³
 -chap⁸が siap⁴となる。即ち, 「十」chap⁸→ap⁴と変
 化する。

[例]

「四十一」si³-chap⁸ it⁴ → siap⁴ it⁴,
 「四十五」si³-chap⁸ go⁷ → siap⁴ go⁷,
 「四十七」si³-chap⁸ chhit⁴ → siap⁴ chhit⁴,
 「四十九」si³-chap⁸ kau² → siap⁴ kau²,
 ニ)「百」よりも大きな数では, 「百」pah⁴は ah⁴
 となる。即ち, 「百」pah⁴が ah⁴と変化する。但し,
 最後が丁度「百」で終わるときは, そのまま pah⁴
 である。

[例]

「六百七十六」lak⁸-pah⁴ chhit⁴-chap⁸ lak⁸ →
 lak⁸ ah⁴ chhit⁴-chap⁸ lak⁸,
 「五百四十」go⁷-pah⁴ si³-chap⁸ → go⁷-ah⁴ si³,
 即ち「十」を省略する。
 「二千五百枝」=「兩千五百枝」nng⁷-chheng¹
 go⁷-pah⁴ ki¹ → nng⁷ chheng¹ go⁷-ah⁴ ki¹ (二
 千五百本),
 「三百錢」san¹-pah⁴ chin⁵ → san¹-ah⁴ chin⁵ (三
 百錢),
 「五百個」go⁷-pah⁴ e⁵ → go⁷-ah⁴ e⁵ (五百個),
 [参考]「五百」go⁷-pah⁴, 「百」=「一百」
 chit⁸ pah⁴, 「二百三十」nng⁷-ah⁴ san¹, 「五百三」
 =「五百空三」go⁷-ah⁴ khong³ san¹。

8) 二個の音節が結合して, 一音節となり, 又
 はその音の或る部分が省略されることが有る。

[例]

「彼大漢」hiah⁴-toa⁷-han³ → hiah⁴-a⁷-han³
 (そんな大男),
 「聽見講」thian¹-kin³⁰ kong² → thian¹-in³⁰
 kong² (話すのが聞こえる),
 「甚麼人」sim²-mih⁸-lang⁵ → 「啥人」sian²
 -lang⁵ (どんな人, 誰),
 「啥人」sian²-lang⁵ → sia²-ng⁵ (誰, どんな人),
 「與人買去」ho⁷ lang⁵ boe² khi³ → ho⁷-ng⁵
 boe² khi³ (人に買って行かれた, 人に買われた),

「要與人買」beh⁴ ho⁷ lang⁵ boe² → beh⁴ ho⁷ -ng⁷ boe² (人に買われるだろう),
 「給人講」ka⁷ lang⁵ kong² → ka⁷ -ng⁵ kong² (人に言ってあげる),
 「好亦有一的唔」ho³ iah⁸ u⁷ chit⁸ e⁵ m⁷ ho³ → ho³ iah⁸ u⁷ che⁸ m⁷ ho² (良いか又は一寸良く無いか),
 「拍(打) 唔見」phah⁴³ m⁷ kiN³ → phang³ kiN³ (紛失する),
 「看一下」khoaN³ -chit⁸⁴ -e⁷ → khoaN³ che⁴ (ちょっと見て), 「一下看」chit⁸ -le⁸ khoaN³ (ちょっと見る),
 「此個」chit⁸ -e⁵ → che¹ (これ),
 「彼個」hit⁴ -e⁵ → he¹ (あれ)。

文 献

文法書・会話書

- 1) 王育徳『台湾語入門』1972, 風林書房, 東京。(台北)
- 2) 王育徳『台湾語初級』1983, 日中出版, 東京。(台北)
- 3) 樋口靖『台湾語会話』1992, 東方書店, 東京。(台北), (台南)
- 4) 陳輝龍『台湾語法』1934初版, 再版, 1936改訂3版, 無名会, 台北。(台北)
- 5) 徳安輝龍『台湾語会話』1942, 台湾語学研究会, 台北。(台北)
- 6) 岩崎敬太郎『日台言語集』1913, 日台言語発行所, 台北。(台北)
- 7) 岩崎敬太郎『台湾語典』1922初版, 1931第7版, 新高堂書店, 台北。
- 8) 鄭良偉, 鄭謝淑娟『台湾福建話の語音結構及び標音法』1977, 学生書局, 台北。(台南)
- 9) 林紹賢, 林紹豪助『実用台語会話』1950, 台湾書店。
- 10) 徐輝浩『実用台語会話』1980, 華星出版社。(厦門)
- 11) 岩永六一『台湾言語集』1895, 中村鐘美堂, 大阪。
- 12) 李春霖『台湾語』1949, 経緯書局, 高雄。
- 13) 川合眞永『日台会話自在』1935第23版, 杉田書店, 台北。(台北)
- 14) 北原癸巳男, 陳戊壬, 松田福信『福州語』1940, 竹腰商店, 台北。(閩北)
- 15) 石川敏男, 白川宣力『海外旅行会話辞典, 台湾編』1989, 昭文社, 東京。
- 16) Thomas H. Roberts 『Speak Taiwanese』1964, 1965再販, Taipei Language Institute, 台北。
- 17) Tsoán Su 『Iá-So⁷ Ki-Tok ê Sin Iok (新約)』1935, Seng-Chheh Kong-Hōe Oah Pan In, Siōng-Hái。

辞 書

- 1) 村上嘉英『現代閩南語辞典』1981, 天理大学おやさと研究所, 奈良。(台南)(台北)
- 2) 台湾総督府『日台大辞典』1931上巻, 1932下巻, 台北; 1981影印本, 衆文図書, 台北。『台湾語大辞典』と改称して, 1983影印, 国書刊行会, 東京。
- 3) 台湾総督府『日台小辞典』1908, 大日本図書, 東京。
- 4) 台湾総督府『日台小辞典』1932, 台北。
- 5) 台湾総督府『台湾俚語集覽』1914, 台北。
- 6) 甘為霖『厦門音新字典』1913初版, 上海, 即ち W. Campbell 『A Dictionary of the Amoy Vernacular』1924再販, 上海。
- 7) J. Macgowan 『English and Chinese Dictionary of Amoy Dialect』1883, Trübner, London; 1978影印本, 南天書局, 台北。
- 8) Carstairs Douglas 『Chinese-English Dictionary of the Vernacular of Spoken Language of Amoy』1973, Trübner, London; 1970 影印本, 古亭書屋, 台北。
- 9) 蔣克秋『实用英厦辞典』即ち Chiang Ker Chiu 『A Practical English-Hokkien Dictionary』勤奮書局 Chin Fen Book-store, Singapore。出版年月未詳。
- 10) 蔡培火『国語・閩南語対照常用辞典』1969, 正中書局, 台北。
- 11) 李木杞『国台音通用字典』1963, 瑞成書局, 台中。
- 12) K. T. Tân 『A Chinese-English Dictionary - Taiwan Dialect -』1978, 南天書局, 台北。
- 13) 徐金松『厦門音字典(四種注音)』1980, 南天書局, 台北。
- 14) 蔡俊明『潮語詞典』1976, 三民書局, 台北。
- 15) 連橫『台湾語典』1975, 国立編訳館, 台北。1963, 台湾銀行, 台北。
- 16) 鄭天福『台語根源』1991, 漢風出版社, 台南。
- 17) 黄謙『増補彙音妙悟』光緒乙巳, 1905, 会文書莊, 厦門。(泉州) 『彙音妙悟』1800, 原著。

((泉州))

- 18) 謝秀嵐『増註殊十五音』会文堂, 厦門。(漳州), 出版年月未詳。
- 19) 謝秀嵐『彙集雅俗通五十音』慶芳書局, 高雄。(漳州), 『増註雅俗通五十音』1818, 原著。(漳州)
- 20) 台湾総督府民政学務部『訂正台湾十五音字母詳解』1908, 台湾日日新報社, 台北。
- 21) 林鵬祥, 周長楫, 魏南安『台湾閩南諺語』1992, 自立晚報文化出版部, 台北。
- 22) 陳修, 陳文晶『台湾語大詞典』1991, 遠流出版, 台北。(漳州)((泉州))
- 23) 魏南安『台語大字典』1992, 自立晚報文化出版部, 台北。

研究書

- 1) 王育徳『台湾語音の歴史的研究』1987, 第一書房, 東京。
- 2) 中嶋幹起『福建漢語方言基礎語彙集』1979, 東京外国語大学, アジア・アメリカ言語文化研究所, 東京。
- 3) 中嶋幹起『閩語東山島方言基礎語彙集』1977, 東京外国語大学, アジア・アメリカ言語文化研究所, 東京。
- 4) 薰同穌, 趙榮琅, 藍亞秀『記台湾の一種閩南語』1967, 中央研究院歴史語言研究所単刊, 甲種之二十四, 台北。
- 5) 薰同穌『厦門方言の音韻』薰同穌先生語言学論文選集 p. 276~p. 297, 1974, 食貨出版, 台北。
- 6) 羅常培, 周辨明『厦門音系』1975, 古亭書屋, 台北。
- 7) 張振興『台湾閩南方言記畧』1989, 文史哲出版, 台北。
- 8) 鄭謝淑娟『台湾福建話形容詞の研究』1981, 學生書局, 台北。
- 9) 李猷章『福建語法序説』1950, 南風書局, 東京。
- 10) 丁邦新『台湾語言源流』1979, 學生書局, 台北。
- 11) 鄭良偉『台語與國語字音対応規律的研究』1979, 台湾學生書局, 台北。
- 12) 洪惟仁『台湾河佬語声調研究』1985, 自立晚報文化出版部, 台北。

民俗

- 1) 片岡巖『台湾風俗誌』1924, 台湾日日新報社, 台北。
- 2) 雑誌『民俗台湾』第1巻第1号(1941年7月)

~第5巻第1号(1945年1月終刊号), 東都書籍, 台北。

- 3) 吳瀛濤『台湾民俗』1970, 古亭書屋, 台北。
- 4) 池田敏雄『台湾の家庭生活』1944, 東都書籍, 台北。
- 5) 堀川安市『台湾の植物』1943, 東都書籍, 台北。
- 6) 劉文三『台湾宗教藝術』1983, 雄獅圖書, 台北。
- 7) 洪惟仁『台湾礼俗語典』1986, 自立晚報社, 台北。
- 8) 立石鉄臣, 向陽『台湾民俗図絵』1986, 洛城出版, 台北。

歌謡

- 1) 鮎澤蒼史『茉莉—閩南語歌謡集—』1991, 蓬萊舎, 名古屋。
- 2) 鮎澤蒼史『窓辺雨—閩南語歌謡集—』1993, 蓬萊舎, 名古屋。
- 3) 陳金田『台湾童謡』1981, 大立出版社, 台北。
- 4) 黄国隆, 李中成, 林金波『台湾郷土歌謡選集』1979, 衆文圖書, 台北。
- 5) 林二, 簡上仁『台湾民俗歌謡』1980, 衆文圖書, 台北。(説明文に反日的言辭多し)
- 6) 臧汀生『台湾閩南語歌謡研究』1977, 台湾商務印書館, 台北。
- 7) [歌仔册 $koa^1 - a^2 - chheh^4$ の例]
『孫悟空大鬧水宮歌』1960, 竹林書局, 新竹。
『食新娘茶講四句』1961, 竹林書局, 新竹。
『鄭国姓開台湾歌』1961, 竹林書局, 新竹。
『探哥探娘相褒歌』1960, 竹林書局, 新竹。
『乞食開藝旦歌』1960, 竹林書局, 新竹。
『月台夢美女歌』1960, 竹林書局, 新竹。
『英台廿四送哥歌。士久人心別歌』1960, 竹林書局, 新竹。
『三伯想思討藥方。三伯婦天歌』1960, 竹林書局, 新竹。
『三伯征蕃歌』1962, 竹林書局, 新竹。
『英台罰紙筆看花燈。三伯英台遊西湖』1956, 文林出版社, 台中。
- 8) 鄭恒隆『台湾民間歌謡』1989, 南海圖書, 台北。
- 9) 張永鐘『台語老歌曲』1990, 立誼出版, 台中。
- 10) 簡上仁『台湾音楽之旅』1988, 自立晚報文化出版部, 台北。
- 11) 簡上仁『台湾福佬系民歌の淵源及發展』1991, 自立晚報文化出版部, 台北。

(1993年2月19日受理)